

文芸祭 合同作品集

ごあいさつ

けんみん文化祭ひろしま実行委員会

会長 横田 美香

「けんみん文化祭ひろしま」は、本県の豊かな自然と伝統に育まれた文化の発掘、継承、育成を図るとともに、新たなひろしま文化の創造を目指し、県民の皆様の文化活動の発表、鑑賞、交流の場として毎年開催しており、今回で36回目を迎えます。

本県では、県民の皆様一人一人が、「安心」の土台と「誇り」により夢や希望へ「挑戦」することで、それぞれの欲張りなライフスタイルを実現できるよう、さまざまな取組を進めており、「けんみん文化祭ひろしま」もその一つとして魅力のある「祭」となるよう、取り組んでおります。

本年の文芸祭にも、多くの県民の皆様から八、六〇二点の文芸作品を御応募いただきましたことに深く感謝申し上げます。栄えある各賞を受賞されました皆様には、心からお祝いを申し上げます。

本文芸祭が皆様の創作活動の励みとなり、一人でも多くの方々に、様々な思いを言葉に綴る楽しさを実感していただき、文芸への理解を深める契機となれば幸いです。どうか、皆様には、本県における芸術・文化の発展に、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。ごあいさつといたします。

目次

短歌

小・中・高校生の部	8
一般の部	22

作品募集要項	162
--------	-----

俳句

小・中・高校生の部	38
一般の部	52

大会記録	165
------	-----

現代詩

小・中・高校生の部	68
一般の部	104

川柳

小・中学生の部	144
高校生・一般の部	152

短 歌

選
者

堀 新 石
内 宅 原
孝 道 豊
子 和 子

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

あの日見た受け入れられぬ父の死が線香をそえる怖き夜の日

呉市立阿賀中学校二年 平本 義仁

広島県議会議長賞

キャンバスに黒いえんぴつ走らせてそこは未来を彩る世界

広島市立船越中学校二年 西村 菜々海

広島県教育委員会賞

いっこ上いとこの姉ちゃん浴衣着て姿はまるで打ち上げ花火

庄原市立西城中学校二年 櫃田 歩由

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

友と友どちらの肩を持つべきか間に挟まる私は団子

廿日市市立廿日市中学校二年 宮地 紗葉

広島市長賞

あつすぎてはっぱのかげにかくれんぼありの足にもくつあげたいな

庄原市立東小学校三年 中野 郁実

広島市議会議長賞

送り火を愛してくれた亡き祖父に今は私が哀を込め灯す

県立広島皆実高等学校一年 鋒楯 莞路

広島市教育委員会賞

八一五平和をいのる時間と日くり返さぬよう思いをこめて

県立広島中央特別支援学校中学部三年 彦坂 琉斗

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

餅まきで近所のおばさん若返る紅白もちを両手で抱え

呉市立呉高等学校三年 兼藤 杏花

石原 豊子 選

特 選

あの日見た受け入れられぬ父の死が線香をそえる怖き夜の日

呉市立阿賀中学校二年 平本 義仁

【評】「線香をそえる怖き夜の日」に辛い悲しみが、また二句の「受け入れられぬ」にその日の作者の感情が滲み出ている。

眠たげな夏の陽ぬくき照る朝に飛び行く残鶯声涼やかに

広島市立安佐中学校二年 鄭 潤希

【評】三句までは夏の暑さを表現し、「飛び行く残鶯声涼やかに」の四句五句に気持ち的な涼しさを表現しているのが巧み。

送り火を愛してくれた亡き祖父に今は私が哀を込め灯す

県立広島皆実高等学校一年 鋒楯 莞路

【評】盆に御霊への「送り火」を大事に焚いていた亡き祖父。偲びつつ作者は祖父の御霊への「送り火」を焚く心の分かる歌。

八^{はち}一^{いち}五^ご平和をいのる時間と日くり返さぬよう思いをこめて

県立広島中央特別支援学校中学部三年 彦坂 琉斗

【評】「時間と日」に終戦の日を大事に思う作者。世界各地から争いの報道のある今、四句の「くり返さぬよう」が効果的。

蛭とぶ陰気な初夏の夜を照らし期間限定イルミネーション

安芸高田市立甲田中学校二年 三橋 菜乃

【評】「イルミネーション」の表現が楽しい。また、「陰気な初夏の夜」と「期間限定イルミネーション」が対比的で良い。

木の柱私と比べた幼少期この場所だけが私の証

呉市立呉高等学校三年 松原 花梨

ひさしぶり正月ぶりに会うそふぼなんだか小さくなつた気がする

庄原市立東小学校四年 足利 昭斗

平和への想い込めてドームの蟬にぎやかだけどさみしさまとう

広島市立安佐中学校三年 柿本 美果

春の花土を受け継ぎ夏の花土に戻るねくる秋をまつ

廿日市市立野坂中学校二年 吉本 祐芽

温暖化青い地球が枯れてゆく僕らの星が涙を流す

福山市立向丘中学校二年 岩田 凌我

友に言う「ありがとう」さえも母に言えずその一言が大きな試練

福山曉の星女子中学校二年 塩飽 未佳

あついなつおこめものがかわくよねいっばいできておいしくなあれ

庄原市立東小学校一年 三宅 望愛

朝顔が朝に咲いたら盛夏の候夜中に咲けば秋色の候

廿日市市立野坂中学校二年 佐竹 咲音

友と友どちらの肩を持つべきか間に挟まる私は団子

廿日市市立廿日市中学校二年 宮地 紗葉

努力して見えてた背中次こそは相手に見せる己の背中

呉市立呉高等学校二年 前田 透空

陰の碑に汗たらしつつまたあえた君はヒロシマ祈念せよ

広島市立安佐中学校二年 土肥 健一

時長く待ちたる日々は首長く神楽終わるは一瞬の時

広島市立安佐中学校二年 政田 成

なり響くむすめふさほせ畳の音高みを目指すかるたクイーン

呉市立呉高等学校三年 河本 聖花

パパとならおぼれるようなたかいなみきようてきだけのりこえられる

庄原市立東小学校二年 森山 瑞巴

短歌への挑戦三年目きびしいがつくっていくうち楽しさが湧く

尾道市立向東小学校六年 吉本 琴音

キャンバスに黒いえんぴつ走らせてそこは未来を彩る世界

広島市立船越中学校二年 西村 菜々海

風が止み水に浮かんだはないかだとり残された枝の花びら

府中市立府中学園八年 栗田 進之介

蝉の音鳴り響く夏の上り坂「今日もやるぞ」と走り続ける

尾道市立向東中学校三年 伊藤 獅恩

参観日友に当てられ発表するなぜか止まない激しい鼓動

廿日市市立廿日市中学校二年 板本 悠熙

鍵盤けんぱんに触れた瞬間走る緊張勇気の先にある達成感

安芸高田市立吉田中学校二年 井上 咲希

新宅 道和 選

特 選

いっこ上いとこの姉ちゃん浴衣着て姿はまるで打ち上げ花火

庄原市立西城中学校二年 櫃田 歩由

【評】けんか相手の従姉。花火大会の浴衣姿にドキリとした。少し乱暴な「姉ちゃん」にみえる作者の気持ちさが微笑ましい。

友と友どちらの肩を持つべきか間に挟まる私は団子

廿日市市立廿日市中学校二年 宮地 紗葉

【評】対立する二人はどちらも友だち。二人の言い分も聞いているうち、こすられて少女はお団子になってしまった。

勉強をしたくないのにしてしまいう受験のことがとても不安で

福山市立駅家中学校二年 石川 巧都

【評】勉強しなければならないのにしないのが凡人。でも作者は強迫観念からでも勉強をする。志望校合格は間違いない。

あついなつ水ふうせんでなげあそび早くにげようでもあたりたい

庄原市立東小学校二年 中村 円架

【評】水ふうせんに当たりたくないけど、当たってきやあきやあ言
いながら楽しみたい気持ちもあるのを上手に詠んだ。

目覚ましに勝った朝はなんとなく未来をちよつと変えた気がする

福山市立幸千中学校二年 佐藤 佑梨

【評】目覚まし時計が鳴る前に起床したのをちよつと大げさに詠ん
だところが面白い。「朝」は「あした」と読みました。

隣から見てゐるカエルがまばたきもしかしてこれ恋の予感か

呉市立呉高等学校三年 宮崎 美桜

コンクール心臓バクバク舞台所で「すごいまい」思わず言つた

尾道市立向東中学校三年 光野 愛花

初めてのライブ始まる直前のチューニング聞き気持ち昂ぶる

県立呉商業高等学校一年 津金 虎琉

もう後半エンジンイしてる夏休みまだまだあるし明日でいいや

福山市立駅家中学校二年 梅田 雅日

妹が大きく口開けほおばったあんこはみ出るかしわ餅を

三次市立布野中学校一年 竹口 彩音

香川での練習試合で初めてのピッチャーマウンド深呼吸する

三次市立布野中学校一年 福岡 悠太

「ちょっときて」家族に呼ばれる日曜日小さな小さなスイカがあつた

福山市立幸千中学校二年 川上 天女

暑い夏つめたいゆかでよくとねこ気持ちいいねといっしょにおひるね

庄原市立東小学校四年 山王 楓真

あつすぎてはっぱのかげにかくれんぼありの足にもくつあげたいな

庄原市立東小学校三年 中野 郁実

ネイルしてリップをぬっておしゃれしてはやくわたしはおとなになりたい

庄原市立東小学校一年 大田咲友里

ゲーム中ふと外見ると「あつ虹だ」思わず手を止め靴履き外へ

福山市立芦田中学校二年 景山 春希

入道雲見てると自分が小さくてなんだか少し走りたくなる

安芸高田市立吉田中学校二年 三浦 陽

自宅からカレーのにおいうれしくてキッチンのぞくとまさかのうどん

廿日市市立廿日市中学校二年 中村 眞子

憧れのセーラーだけどホントはねりボン結ぶのメンドクサイの

県立広島皆実高等学校一年 西原 鈴

花火まだできてないのに夏休みしずかにすぎたなんかさみしい

福山暁の星女子中学校二年 高橋瑠莉子

幼き日祖父に連れられ行く水路しなる竹竿宙を舞うカニ

県市立阿賀中学校二年 祝 龍汰

餅まきで近所のおばさん若返る紅白もちを両手で抱え

県市立呉高等学校三年 兼藤 杏花

自家製のキュウリの曲がり覚えありおもいだすのは祖父母の背骨

県立広島皆実高等学校二年 石川直太朗

夏休みしめきりまえのしゆくだいを夜には母にたよって終わる

庄原市立東小学校三年 爲藤 百

真夜中に登校してきたみたいだな雨の日の外まっくろいとき

広島市立祇園東中学校二年 神野 堇

堀内 孝子 選

特 選

キャンバスに黒いえんぴつ走らせてそこは未来を彩る世界

広島市立船越中学校二年 西村菜々海

【評】鉛筆でひたすら下絵を書いている作者。未来を彩る世界で、どんな絵が描けるかワクワク感が伝わってくる。

つらつらと願い込めては紙丸め決意記した志望理由書

呉市立呉高等学校三年 砂賀帆乃佳

【評】大学進学のか望理由書を何回も書き直している様子が浮かんでくる。願いを込めてやっと書きあげ希望が感じられる。

あつすぎてはっぱのかげにかくれんぼありの足にもくつあげたいな

庄原市立東小学校三年 中野 郁実

【評】暑かった夏、ありも暑くて葉っぱのかげにかくれんぼしているのかなとありの様子をよく観察し優しさが伝わってくる。

陸上部海まで駆けた夏の空水切りの石波に輝く

呉市立仁方中学校二年 平本 敦子

【評】海まで走った陸上部員。激しい部活の合間、水切りをしている様子が浮かび、しばしの安らぎが感じられる。

餅まきで近所のおばさん若返る紅白もちを両手で抱え

呉市立呉高等学校三年 兼藤 杏花

【評】近所のおばさん若返る、紅白餅を両手で抱えと、具体的に餅まきの様子が表現されて楽しい歌。リズムも良い。

喜びの響く産声分娩室窓の外には銀杏輝く

呉市立呉高等学校二年 田畑 杏莉

また一步一步前進決意して駆け出す私の背を押す夕日

呉市立仁方中学校二年 福山 智規

高得点次は取るぞと意気込んで必死に勉強とつた100点

安芸高田市立吉田中学校二年 源田 悠心

あの日見た受け入れられぬ父の死が線香をそえる怖き夜の日

呉市立阿賀中学校二年 平本 義仁

静かさが居心地の良い図書室で自分の世界の扉を開く

三原市立大和中学校二年 谷本 結菜

古希祝うおばあちゃんへマグカップ元気でいてね思いを込めて

三原市立大和中学校二年 小原 陽光

あついなつおこめものがかわくよねいっばいできておいしくなあれ

庄原市立東小学校一年 三宅 望愛

目指そうよ核兵器なき世界へと今年で被爆八十年か

県立広島中央特別支援学校中学部三年 中谷 悠人

更衣クローゼットの扉あけ高校最後の夏袖とおす

呉市立呉高等学校三年 酒井 莉子

外見るとツバメの親が巣に入る子どものためにまた飛び出した

庄原市立比和中学校一年 深川 結菜

家族のため働いている両親に伝え続ける感謝の気持ち

尾道市立御調中学校二年 青山 彩華

桜散り川に流れる花びらが風光明媚絨毯のよう

廿日市市立野坂中学校二年 岡田 陸翔

仲間からもらったパスで走り出す届かなかったあと一歩だけ

安芸高田市立甲田中学校二年 高橋 美結

田んぼから聞こえる声に耳澄ます蛙の家族演奏始め

三次市立布野中学校一年 森島 陸市

夏空に今飛び立った燕の子心地よい風に翼をあずけて

尾道市立向東中学校三年 大本 愛葵

ふりあげるこの一瞬で点が決まる大歓声のバレーコート

広島市立安佐中学校二年 出店 宥人

虫の声月が昇るとひびき出す夏のきれいな合唱団

安芸高田市立甲田中学校二年 西寅 夢桃

体育館絶えることないドリブル音みんなで夢見た呉市一位

呉市立阿賀中学校二年 清水 勇佑

かつとばせ！ぐんぐん伸びてホームラン真っ赤に染まった観客席へ

呉市立川尻中学校二年 脇田 陽菜

かわいいな癒しをくれてありがとう猫のとのくん私のペット

呉市立呉高等学校三年 松浦 幸来

一般の部

入賞

広島県知事賞

会議場の広き空間黙深し原爆死没者名簿の揮毫

広島市 伊藤 恒子

広島県議会議長賞

ねんごろに父の義手干す秋晴れの庭にいちにち蜻蛉とびかふ

福山市 林 すみ

広島県教育委員会賞

いにしえを慈しむことからすうり白き花もて廃家をおおう

広島市 高本 寿子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

いつの日かこの一分の暗闇がひかりになれと握る小さき手

広島市 浮田 大樹

広島市長賞

駅前大橋を路面電車はおもむろに八十年前の爆心^{やそとせ}へ向かふ

三次市 礪井ふみ子

広島市議会議長賞

片足を無くした夫に励ましの言葉探して車椅子押す

広島市 西岡 昌子

広島市教育委員会賞

かけはぎの鮮やかなりし母の腕荒む想いも繕いたるや

福山市 富田 清人

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

生きるなく死ぬにあらずもクマムシの乾眠の妙に遠く及ばず

三原市 園部 恵子

石原 豊子 選

特選

会議場の広き空間黙深し原爆死没者名簿の揮毫

広島市 伊藤 恒子

【評】 毎年被爆者の方にて行われる原爆死没者名簿への記帳。その緊張感が上の句に的確に表現されていて心に沁みいる歌。

かけはぎの鮮やかなりし母の腕荒む想いも繕いたるや

福山市 富田 清人

【評】 かけはぎの上手な母。しかし、辛いことなども上手に乗り越えたであろう母を、かけはぎになぞらえた下の句が光る。

幸せは身近なことにあると言う一匹の秋刀魚ふたりの夕餉

呉市 中島 義夫

【評】 一匹の秋刀魚を二人で分け合っていたたく夕餉。それこそが一番の幸せだと作者は感じている。同感できる一首である。

生きるなく死ぬにあらずもクマムシの乾眠の妙に遠く及ばず

三原市 園部 恵子

【評】クマムシは極限の環境にも耐えうる微小な動物。上の句で地球環境の変化に耐えている作者とクマムシの乾眠の比較が妙。

いにしえを慈しむごとからすり白き花もて廃家をおおう

広島市 高本 寿子

【評】「廃家」は作者の実家であったか、今は住む人もない。上の句の「いにしえを慈しむごと」の比喩表現が巧みである。

ねんごろに父の義手干す秋晴れの庭にいちにち蜻蛉とびかふ

炭化せし幹癒やすがにアオギリが季来れば黄の花殻を敷く

炎帝の街かがやける広島^の戦禍は杳し八月の雲

耳鳴りの続く淋しさ空をゆく雲に音あるごとく聞こゆる

包帯の坊やおぶった小学生いかに生きたや八月六日

試歩終えし妻に肩貸し歩を合わす暮れなずむ島^のあじさいロード

いつの世も戦のありて城跡に石垣のみが残れる哀れ

会いたきは会いておくべし八十路なる吾に与えらるる時間限りあり

枕辺に青空しばしとどめたき母はベッドに手鏡を置く

駅前大橋を路面電車はおもむろに八十年前の爆心^{やそとせ}へ向かふ

福山市 林 すみ

広島市 大多和 義

三次市 林 勝子

福山市 杉之原壽美

呉市 小川美和子

尾道市 仲尾 修

広島市 山本 玲子

福山市 金尾 洵子

広島市 岩本 幸久

三次市 磯井ふみ子

遙かなるニューギニアにて餓死せらる伯父に供える大盛りの飯

三次市 林 章子

川沿いのバラック暮らし馴れた頃くじが当たりし高層アパート

広島市 小西 博子

就職の娘と最後の卓囲む風邪ひかぬよう会話少なく

庄原市 松本 進

するすると絹のリボンを解くごとく吐きたきものは終の一息

広島市 永井 勝弘

葉桜の車窓に光あふれ来て万華鏡の中行くがごとしも

尾道市 砂田 悦子

太陽に抗うごとく咲き昇る凌霄花は日の色をして

庄原市 橘 京子

六年の感謝を妻に伝へれば蟬が鳴きだす結婚記念日

広島市 熊谷 純

実の裂けて赤き種粒の弾けたる枝垂れてこぼるる苦瓜の夏

広島市 松田高加子

のぼり来しチヌの魚影は十余り涼風の吹く橋を来れば

広島市 清水 勝子

峡の宿のとどめく川音籐椅子に投げだしてをり白き素足を

呉市 西川 博

新宅 道和 選

特 選

いつの日かこの一分の暗闇がひかりになれと握る小さき手

広島市 浮田 大樹

【評】「一分の暗闇」は黙祷のことか。作者は子どもと手を繋いで祈ったのだろう。作者と同じく「ひかりになれ」と願う。

会議場の広き空間黙深し原爆死没者名簿の揮毫

広島市 伊藤 恒子

【評】新たに亡くなった被爆者の名を名簿に書き加える光景。「広き空間黙深し」から厳かで静謐な作業の様子が伝わってくる。

ねんごろに父の義手干す秋晴れの庭にいちにち蜻蛉とびかふ

福山市 林 すみ

【評】義手を干すという珍しい光景。ご苦勞があつたと思われるが、「秋晴れの」以下で今の穏かな生活が想像できる。

いにしえを慈しむごとからすうり白き花もて廃家をおおう

広島市 高本 寿子

【評】 なんだか妖しいからすうりの花だが、慈しむように廃屋を覆っている。「天空の城ラピュタ」のロボットのような。

皆が皆スマホに夢中の車内にて桜並木を独り占めする

広島市 山口 順子

【評】 殆どの人がスマホを見ている電車の中で、作者は景色を楽しんでいる。結句の「独り占めする」が効いている。

連休がわが家の前を素通りし両手広げて待つ家に行く

呉市 平賀 敏子

満州の考と妣との物語姉は日本に辿り着けずに

広島市 ⑦ パパ

片足を無くした夫に励ましの言葉探して車椅子押す

広島市 西岡 昌子

十二年働き続けた炊飯器壊れて今は時だけ刻む

庄原市 松園 和子

道の駅の喫煙ルームの梁の上身を乗り出して鳴くつばめの子

廿日市市 辻 美恵子

売り切れのランプが並ぶ自販機で待機しているコーンポタージュ

広島市 羽城 裕子

音満つる朝の厨は落ち着かぬパンが焼けたぞ洗濯できたぞ

広島市 小坂 修

おはやうの挨拶代りに蚊が止まるわれもぱちんとお返しをする

広島市 木戸 博恵

耳鳴りの続く淋しさ空をゆく雲に音あるごとく聞こゆる

福山市 杉之原壽美

半数が癌となりたる世となるか「風邪」告げるよに「癌」告げる女医

広島市 越智 隆義

核ボタン押す人わずか犠牲者は幾千万の老若男女

三次市 山本 圭子

銃口をおき思い出せくちびるに百万本のバラの歌声

呉市 清水 孝子

賑わえる夜店で買いし狐の面もどりて一人の真夜を被れり

広島市 田中 博子

川沿いのバラック暮らし馴れた頃くじが当たりし高層アパート

広島市 小西 博子

遥かなるニューギニアにて餓死せらる伯父に供える大盛りの飯

三次市 林 章子

実の裂けて赤き種粒の弾けたる枝垂れてこぼるる苦瓜の夏

広島市 松田高加子

自転車に妹二人乗せ五里の砂利道行きぬ父の見舞いに

広島市 中村 武

炭化せし幹癒やすがにアオギリが季^{とき}来れば黄の花殻を敷く

広島市 大多和 義

生かされて今日も美味しいしょうがの湯データービスは最後の楽園

尾道市 卒寿姫

モルダウのかすかに聴こゆ馬洗川鵜のかがり火が水面を照らす

三次市 林 敏明

堀内 孝子 選

特 選

ねんごろに父の義手干す秋晴れの庭にいちにち蜻蛉とびかふ

福山市 林 すみ

【評】お父さまの手がむれないように、秋晴に義手をしっかり乾かす優しい様子が浮かんできく。蜻蛉とびかふも良い。

駅前大橋を路面電車はおもむろに八十年前の爆心^{やそとせ}へ向かふ

三次市 磯井ふみ子

【評】原爆ドームに続く路線は、今も変わらず爆心地へと走っている。八十年前を決して忘れてはならない思いが伝わってくる。

九十九の姉に認^{したた}むこの手紙これが最後と真夜に墨書す

世羅郡世羅町 高本 澄江

【評】姉妹の絆はいつまでも強く、手紙を書かれる方も読む方もしっかりとされている様子が感じられる。墨書にも感心した。

片足を無くした夫に励ましの言葉探して車椅子押す

広島市 西岡 昌子

【評】事故でしようか。御主人にかける言葉を探しながら、車椅子を押して見守る作者の姿が浮かんでくる。

満開のミツマタトンネルくぐりぬけ移り香乗せて春持ち帰る

広島市 奥田 亮子

【評】春先に咲くミツマタの花。その群生のトンネルをくぐり抜けていく様子と、感動が楽しく感じられる。春持ち帰るも良い。

包帯の坊やおぶった小学生いかに生きたや八月六日

呉市 小川美和子

入幕し史上最速横綱へ明るいニユース石川の星

三次市 石原 愛子

朽ちた木の洞へと風は入りこみ戦死の祖父の声を引き出す

庄原市 古家八千代

あと何度夏を一緒に過ごせるか難病指定受付すます

広島市 岡田 郁枝

葉桜の車窓に光あふれ来て万華鏡の中行くがごとしも

尾道市 砂田 悦子

五時間の輸血の夫を娘に委ね再起を願う夕暮れの空

広島市 山田 雅子

鎮魂の願いを込めて高らかに平和祈念の鐘鳴り響く

広島市 加土 道子

生かされて今日も美味しいしょうがの湯データービスは最後の楽園

尾道市 卒寿姫

渡船いま長き歴史に別れ告ぐ尾道水道に汽笛残して

福山市 高橋千恵子

文学も漫画も百円というフリマ漫画ばかりが売れる寂しさ

福山市 肥後 弘子

試歩終えし妻に肩貸し歩を合わす暮れなずむ島のあじさいロード

尾道市 仲尾 修

湖に殺処分されし白鳥の声のみ流れるときわ公園

広島市 田辺 操子

耳鳴りの続く淋しさ空をゆく雲に音あるごとく聞こゆる

福山市 杉之原壽美

ベッドから天井見つめもう一度再起を誓い励むりハビリ

広島市 松本壽賀子

母恋し新盆^{にいぼん}終えて訪ね寄る西方^{にししかた}の磯潮騒をきく

広島市 末田 敦子

炭酸がシュワシュワシュワとはじけ跳び口の中まで夏色になる

広島市 寺澤 紀子

売り切れのランプが並ぶ自販機で待機しているコーンポタージュ

広島市 羽城 裕子

流灯の平和希求のメッセーシ若者熱く練る爆心地

安芸郡府中町 石橋 康徳

シャボン玉手にとどめんと幼な児は追いたり五月のひかりの空を

広島市 三澤 明美

ふるふると早苗が揺れる畔道に鯉のぼり立ち子らは駆けゆく

庄原市 古家美壽枝

俳句

選
者

山 川 大
根 崎 上
正 益 充
巳 太 郎 子

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

入学式ぎゅつとつないだ小さな手

福山市立伊勢丘小学校六年 福島 心渚

広島県議会議長賞

炎天下ヒット一本夢つなぐ

英数学館中学校三年 桐山 昂大

広島県教育委員会賞

背中押す希望の道へ春の風

廿日市市立大野中学校三年 日中 春希

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

梅雨明けの街を映した水たまり

福山市立駅家南中学校三年 佐藤菜々子

広島市長賞

さつまいもほかほかするよ心もね

廿日市市立地御前小学校三年 福田 琴葉

広島市議会議長賞

潮の香に蟬のこゑ乗る鞆の浦

並木学院福山高等学校一年 森 蓮杜

広島市教育委員会賞

一言が君に届かぬかき氷

呉市立川尻中学校三年 片岡 太希

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

風鈴や祖母との日々があふれ出す

呉市立川尻中学校三年 西尾 倫

大上 充子 選

特 選

入学式ぎゅつとつないだ小さな手

福山市立伊勢丘小学校六年 福島 心渚

【評】新一年生の入学式。未知の世界への緊張感が中七の表現でしっかり伝わって来る。大丈夫と言ってあげたくなる。

太陽がプールの子どもながめてる

庄原市立比和中学校一年 深川 結菜

【評】元氣よく泳ぎ廻っている子供達をぎらぎら照っている太陽もよろこんで見守ってくれているようだ。

振り抜いた打球の先には虹がある

広島市立祇園東中学校三年 森山 琥太郎

【評】部活の練習の様子が上手に表わされている。下五の季語がよく効いている。希望のある臨場感のある句。

風鈴や祖母との日々があふれ出す

呉市立川尻中学校三年 西尾 倫

【評】ありし日の穏やかな祖母との生活を、風鈴が過去の思い出を
継いでくれている。しみじみとした句。

虹だって！みんなで指さす掃除中

呉市立呉高等学校三年 平川 莉央

【評】放課後の掃除中、誰かが虹を見つけた。一斉に窓に寄ってし
ばし眺めた。誰もが夢をもつて…これも青春。

桜まい別れも出会いもやってくる

廿日市市立地御前小学校六年 増田 資生

どこいこう気持ちもあがるころもがえ

坂町立小屋浦小学校四年 谷本 紀花

風鈴が風といっしょにおどってる

坂町立横浜小学校六年 松本咲優香

どんぐりをひろってポケットまんたんに

三次市立作木小学校三年 峠 潤

風船がからっと晴れる空へ旅

廿日市市立佐方小学校五年 松本 彩葉

水しぶき私が光る夏がきた

福山市立伊勢丘小学校五年 山本 結華

まちあわせあの子見つけたぼんおどり

庄原市立東小学校五年 稲島 玲奈

おじいちゃんひまわりめいろ作ってる

海田町立海田小学校五年 石川紗也奈

背中押す希望の道へ春の風

廿日市市立大野中学校三年 日中 春希

梅雨明けの街を映した水たまり

福山市立駅家南中学校三年 佐藤菜々子

校庭にフルート響く春うらら

福山市立駅家南中学校三年 西岡 璃十

春の土スパイクのあとまっすぐに

庄原市立庄原中学校三年 藤光 巧

紫陽花や自由な恋に憧れて

呉市立川尻中学校三年 山田このみ

雲雀笛夢を抱えてペダルこぐ

呉市立川尻中学校三年 平山麗美亜

ポリポリと採れたて胡瓜丸かじり

呉市立仁方中学校三年 上利ちゆき

炎天下ヒット一本夢つなぐ

英数学館中学校三年 桐山 昂大

春風が先輩達を連れてった

県立広島皆実高等学校二年 灰塚 結

あなたとの恋のスピード蝸牛

呉市立呉高等学校二年 宮畑 大生

蒲公英と園児の帽子おそろいだ

呉市立呉高等学校三年 兼藤 杏花

春来る小さな巨人並び行く

県立広島皆実高等学校三年 水国 颯斗

川崎益太郎 選

特選

一言が君に届かぬかき氷

呉市立川尻中学校三年 片岡 太希

【評】一言が言えない恋心。悶々としている作者。かき氷が「早くしないと溶けちゃうよ」と言っているかも知れない。

お年玉五千億円ほしいんだ

大竹市立大竹小学校四年 村尾 拓真

【評】お年玉に五千億円くれとか。何に使うのだろう。悪い事には使ってほしくないが……。末恐ろしい句である。

新米を夢見て食べる備蓄米

東広島市立向陽中学校三年 久田 悠月

【評】備蓄米しか口に出来ない日々。夢にまで出てくる新米願望。こんな社会に誰がした。

サンタさんこわれたゲームなおしてね

廿日市市立地御前小学校四年 末次 奏太

【評】 サンタにプレゼントとして、修理をお願いするというユニークな句。もしかしてサンタの正体を知っているかも。

未来みて勉強励む夏休み

廿日市市立大野中学校三年 藤原 愛理

【評】 こんなまじめな俳句もあるのかと感心した。本人の言葉でなく、周りから言われていることか。真実はどこに。

鰯雲夢と現実縦と横

あれあれれひなにんぎょうがほほえんだ

花火みて散りゆく君の恋模様

海開き男はみんな恋敵

拾う栗拾われまいとトゲむける

天の川一期一会のこの出会い

炎天下ヒット一本夢つなぐ

落ち葉ふみなんてすてきな効果音

雪の中君と初めて手をつなぐ

夏終わり母の怒号が鳴り響く

県立広島皆実高等学校一年 津村 昊和

廿日市市立地御前小学校二年 神崎 唯乃

尾道市立向東中学校三年 真山 公志

呉市立呉高等学校二年 外蘭 青斗

広島市立祇園東中学校三年 廣木 亮太

福山市立伊勢丘小学校六年 安田 栞理

英数学館中学校三年 桐山 昂大

呉市立呉高等学校二年 松宮 奈槻

呉市立吉浦中学校三年 野間 千夏

広島市立安佐中学校一年 河野遡太郎

雪がとけぼくの心もとけてゆく

廿日市市立地御前小学校六年 新見 義弘

さつまいもほかほかするよ心もね

廿日市市立地御前小学校三年 福田 琴葉

我君と星より遠き冬銀河

尾道市立尾道みなと中学校三年 池田 凜風

打ち上がる花火とともに打ち明ける

呉市立呉高等学校二年 高川 新菜

命つきセミのぬけがら残る意思

東広島市立高屋中学校三年 黒川 琉翔

ペン止まり未来の重さ春惜しむ

廿日市市立大野中学校三年 井上 美優

アブラゼミ短い命今灯す

廿日市市立地御前小学校四年 小山尚之助

曲がりつつどこか笑ったきゅうりかな

県立千代田高等学校一年 前 ひより

ころもがえきせつがわりの風物詩

坂町立横浜小学校四年 美奈 歩

香るたび焦りと勇氣沈丁花

廿日市市立大野中学校三年 田村 紫羽

山根 正巳 選

特 選

潮の香に蟬のこゑ乗る靛の浦

並木学院福山高等学校一年 森 蓮杜

【評】靛の浦の夏の景色が浮かぶ。蟬の鳴き声が潮の香りに乗って聞こえてくると捉えた作者。その感性が素晴らしい。

入学式ぎゅっとないだ小さな手

福山市立伊勢丘小学校六年 福島 心渚

【評】六年生が新一年生の手を引いて入場する入学式。緊張からか強く握った一年生の手が小さくて驚いている様子が見える。

曇天の空は重し梅雨の朝

県立広島皆実高等学校二年 坂本 あゆ

【評】梅雨の時期は曇り空が続く。朝見上げる空は曇天。厚い雲に押されて空気を重く感じる梅雨の朝が上手く描けた。

好きなのに浴衣の君に言えぬまま

呉市立吉浦中学校三年 早川 亜希

【評】夏祭の出来事であろうか。彼女に告白をしようと決めていた彼。浴衣姿の彼女に最後まで言えなかった彼の心が切ない。

夏課題最後の日まで奮闘す

広島市立船越中学校三年 藤田 雅紀

【評】夏休みの課題は先送りをしがちである。課題を遣り遂げるため夏休みの最後の一日を懸命に頑張っている姿が浮かぶ。

入 選

満開の桜トンネル駆け抜けて

桜散る短い時を共に居て

揺れの中まどろむ午後春列車

灯籠の流れる川へ願いのせ

夕立に降られ入った君の傘

街中が光に満ちたクリスマス

夏合宿早起きをして走り込む

カマキリのす速い動き目が光る

かぶとむしつのであいてをもち上げる

早起きで朝から元氣セミの声

廿日市市立大野中学校三年 谷口ひかり

呉市立吉浦中学校三年 片岡 怜菜

東広島市立高屋中学校三年 戸川 和香

呉市立呉高等学校三年 河本 聖花

呉市立呉高等学校三年 榎本こころ

呉市立呉高等学校二年 好川 礼美

県立広島皆実高等学校三年 田室 陽羽

大竹市立大竹小学校四年 岩岡 良

廿日市市立佐方小学校二年 角西 颯馬

廿日市市立地御前小学校五年 富永 葵依

みずあそびとうさんねらってみずかける

海田町立海田小学校一年 小福川貴一

天の川夢よ叶えと願う夜

呉市立呉高等学校二年 アビヤンサトシ

アスリート流れる汗は輝いて

呉市立呉高等学校二年 西垣内結衣

背中押す希望の道へ春の風

廿日市市立大野中学校三年 日中 春希

ゆらゆらら踊るはなびら空一面

広島市立祇園東中学校三年 越智 心晴

ランドセル笑顔でせおう入学日

廿日市市立佐方小学校五年 皿田 彩純

校門に手を振る君と春の風

広島市立祇園東中学校三年 三浦 果凜

梅雨明けの街を映した水たまり

福山市立駅家南中学校三年 佐藤菜々子

さつまいもほかほかするよ心もね

廿日市市立地御前小学校三年 福田 琴葉

手を合わせ受験番号確かめる

廿日市市立佐方小学校六年 正岡 祐杜

一般の部

入賞

広島県知事賞

ほたる飛ぶ闇に言伝て書くやうに

三次市 田中 暁美

広島県議会議長賞

まちぶせと繕ひ上手女郎蜘蛛

福山市 栗本 リカ

広島県教育委員会賞

原爆忌平和の鐘にある余韻

福山市 渡辺 素子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

合歓咲くや母に詫びたき事ひとつ

広島市 徳毛 佳美

広島市長賞

蜩や人は死の日を石に彫り

尾道市 前中 吾一

広島市議会議長賞

日盛や通りに動くものの無く

広島市 下田あつ子

広島市教育委員会賞

平和とは婿と夫の大昼寝

広島市 川手 和枝

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

父の日に父となる子の父の顔

福山市 久保 絃子

大上 充子 選

特選

蝸や人は死の日を石に彫り

尾道市 前中 吾一

【評】墓石に亡くなった命日を彫りつける。当り前のことをさりげなく詠う実感であり、納得のいく人生訓のようだ。

ほたる飛ぶ闇に言伝て書くやうに

三次市 田中 暁美

【評】やさしいかな文字で一筆書きを綴るように優美に飛ぶ蛍の様子を詠まれている。

父逝きて義手の遺りし敗戦日

福山市 林 すみ

【評】戦争で失くした手を義手で生き抜いて来られたその父が逝き、義手だけが形身となってしまった。敗戦日を思う。

まちぶせと繕ひ上手女郎蜘蛛

福山市 栗本 リカ

【評】蜘蛛が獲物を捕らえる為の生きる知恵を上手に五七五にまとめられている。破れても破れても繕ふ根気の良さ。

星祭平和の文字の多き街

広島市 池田 萩邨

【評】県外からの観光客が決まって言う。広島は年中平和について
の文字が多く目につく。さすが平和都市広島と。

入 選

不器用に生きて余生を稲の花

広島市 原田 妙子

峡どこも青田となりて風の的

竹原市 前田美木枝

浪音や宗箇が塚に梅雨の蝶

広島市 星加 鷹彦

父の日に父となる子の父の顔

福山市 久保 絃子

チクと刺す棘を宥めて青柚挽ぎ

豊田郡大崎上島町 若山 修二

「二重虹」駆け出す子らの指の先

府中市 背尾 則子

激戦を涙で語る生身魂

福山市 小林 翠子

この頃の鍬の重さや木の葉髪

呉市 大林 達郎

徘徊の猫と目が合ふ溽暑かな

広島市 熊谷 純

兵隊を送りし駅や立葵

尾道市 小滝 凡人

きんぎよと書く木つ端の墓標赤のまま

呉市 筈谷 美保

平和とは婿と夫の大昼寝

広島市
川手
和枝

ふりふりと歩く一歳小鳥来る

吳市 宮首美代子

仏桑華樹下に平和の歌ひびく

広島市 秋好よし江

朝日さす被爆デルタの蟹の穴

広島市 大島 文子

飛蝗追ふ残業の母待ちながら

広島市 結城はるか

まるみみ象の受胎告知やうららけし

広島市
山崎
華園

あの甚平じいじと解る湯屋帰り

広島市 嶋治久美子

リヤカーに白き花束原爆忌

廿日市市 辻 惠風

合歡咲くや母に詫びたき事ひとつ

広島市 徳毛 佳美

川崎益太郎 選

特選

原爆忌平和の鐘にある余韻

福山市 渡辺 素子

【評】余韻という情に流されるような言葉に被爆八十年の艱難辛苦等を秘めて、平和の鐘は今日も鳴り、鳴らされる。

万緑や爆死の数の四捨五入

広島市 永井 勝弘

【評】命は地球より重く、四捨五入されるものではないが、爆死者には、この原則が通用しない。平和は遠い遠い。

拉致家族老いてなお待つ遠い春

広島市 正山 史明

【評】総理が又変わる。最優先課題とは口先だけ。老家族の辛労はいかほどか。政治の役目はどこにある。春が又遠退く。

原爆忌ひとりぼつちにしないでね

福山市 馬場 紫苑

【評】被爆八十年。夫婦でいられる日は後何年か。一緒に逝くのは無理でも、自分より先には逝かないで。最後のお願い。

まちぶせと繕ひ上手女郎蜘蛛

福山市 栗本 リカ

【評】女郎蜘蛛の生態を面白く表現した句。目を付けられると命が危なそうで恐い。男にとっては、恐ろしい句である。

入 選

合歡咲くや母に詫びたき事ひとつ

広島市 徳毛 佳美

ひまわりや娘の彼になっちゃった

安芸郡府中町 水野 英明

徘徊の猫と目が合ふ溽暑かな

広島市 熊谷 純

平和とは婿と夫の大昼寝

広島市 川手 和枝

恋しらず恋占いの桜貝

東広島市 天野 節子

原爆の逆火の如き酷暑かな

広島市 篠崎 筍井

難聴の吾は目で聴く蝉時雨

広島市 伊勢 眞介

父の日に父となる子の父の顔

福山市 久保 紘子

父母の言の葉包む柏餅

福山市 西山 小春

峡どこも青田となりて風の的

竹原市 前田美木枝

箒目の五線譜のごと落つ椿

尾道市 砂田 千春

台風の目の中どれも澄んでいる

広島市 河上 摩子

小さき葉の小さき氷柱に癒されし

庄原市 新宅 涼枝

老々や限界集落冬ざるる

広島市 永宗 啓司

朧月老いに試練のパスワード

広島市 小坂 修

楚々と咲くどくだみの白無心なり

竹原市 古田比呂子

父の日や抽斗奥のあんま券

広島市 金子 蒼

夏の雲川面に浮かぶ絵画なり

福山市 繁田 滋子

皺の手の皺に隠れし種を蒔く

福山市 瀬尾ちとみ

青年の清しき顔の蟬落ちる

広島市 白倉 靖子

山根 正巳 選

特 選

日盛や通りに動くものの無く

広島市 下田あつ子

【評】 暑い盛りに出歩くものなどいない。日盛の熱い大気が満ちた静かな通りの様子を「動くものの無く」と上手く描いている。

ただ今を生きる幸せ新酒酌む

福山市 岩元 剛

【評】 今を生きることの幸せを感じながらの日々の暮し。一年振りに新酒を飲むのは格別の幸せ。心豊かな人生が見える。

病室にあがる喚声遠花火

東広島市 山田美佐子

【評】 遠くに花火の見える病室で患者さん達の花火見物。大輪の花火に思わず喚声があがる。消灯前の楽しいひととき。

ほたる飛ぶ闇に言伝て書くやうに

三次市 田中 暁美

【評】光の尾を引いて飛ぶ蛭。その光の尾を短い言葉を書いているようだと見た作者。どんな言伝てが見えただろうか。

聖鐘の相和すみ空長崎忌

福山市 波多野千鶴子

【評】原爆で失なわれた浦上天主堂の双塔の鐘が八十年振りに復活した長崎忌。「相和す」鐘の音は慰霊と平和への祈り。

入 選

鳩の子の肩で息する大暑かな

廿日市市 長岡はるみ

威勢よき声につられて初鰹

安芸郡府中町 池野つむぎ

梅干すや祖母の遺せし策二枚

三次市 林 敏明

合歡咲くや母に詫びたき事ひとつ

広島市 徳毛 佳美

虫かごと凶鑑に見入る稚児と母

山県郡安芸太田町 齊藤たえ子

顔見せてくれる孝行暖かし

福山市 箱田富久恵

バス停の別れ永久かも秋の暮

三次市 林 勝子

涼しさや艫より愛でる常夜燈

福山市 長月 憂

空手にて立つ我一人月冴ゆる

東広島市 野田 和映

強東風に天満宮の絵馬騒ぐ

広島市 山口 順子

八十年戻る一日の原爆忌

広島市 平山 英子

三世代一つの祈り原爆忌

広島市 羽城 裕子

原爆忌平和の鐘にある余韻

福山市 渡辺 素子

身じろがず黙禱一分終戦日

福山市 濱田喜代恵

祈り打つ大和の時鐘終戦日

呉市 青木 啓子

つばくろに土間の小窓を開けておく

安芸郡府中町 石橋 康徳

雨の糸斜交ひに切り燕飛ぶ

廿日市市 今田 笹舟

団扇まづ風を試して母に向け

福山市 大塚 文枝

河鹿笛神話の里の夕間暮れ

広島市 山本 憲治

灯台へ寄せる波音雲の峰

福山市 山本 昭夫

現代詩

選
者

万 豊 橘

亀 田

佳 和 し

子 司 ぶ

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

センチメンタル

枯れた造花

君の手紙

愛情なんて廃れて

寂しそうにしている

親に貰った愛情

返せなかった感動

ストレス性蕁麻疹

ごめんなさい、言いたい

^{エル}1になったS字フック

真っ直ぐ進んでく

私の人生表してるのか

熊野町立熊野東中学校三年 田中 未来

挑戦する君が羨ましい

親指と人差し指

仲良くくっついて

薬指と小指なんて

寄り添って楽しそう

大丈夫だよ

中指が一番、堂々としてて
かっこいい

小さい頃から全力だった

もうガンリンも入ってないのに

必死に進む小さい車

結局これからどうすればいいんだろう

私を傷つけたアイツは

私の友達と楽しそうでさ
私を傷つけた私は
眺めてるだけなんて

いつの間にかみんなさ
上の方にいて
それを見あげるんだけどね
いつの間にか上なんて見なくなった
見れなくなった

「夜に爪を切るな」
なんておばあちゃんが言った
「百回しゃっくりしたら死んじゃうよ」
なんて幼稚園の子供

味のする朝食
ハッピーエンドな結末
待ってるけど、待ってるけどさ。
勿忘草と一緒に

百回目のしゃっくり

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

風呂

県立広島中学校三年 三宅美葡子

脱衣所で服を脱いでいるとき
湯船には人間くらのカエルがいて
緑色の肌をつやつやさせて
真っ赤なワインを舐めている
私が戸に手をかけると
あわててグラスごと飲み干して
欠けた石鹸になってしまう
だから私はワインの銘柄を知らない

シャンプーを流しているとき
背中の鏡ではきつと
幽霊が大勢詰めかけて
変顔大会をやっている
他の家でやってくれ、と思う

湯あたりした日なんかには
天井の板がパコッと外れて

鉤縄が落ちてくる

いつも天井を睨んでいるせい
かまだ忍者に会ったことはない

頭の先までほくほくして

風呂を出たら

もちろん、腰に手をあてて

冷えた麦茶を流し込む

ぶはー

広島県教育委員会賞

帰省

熊野町立熊野東中学校三年 土肥 朋花

からからり ぬけがらの声
これはくまぜみ あれはにいにいぜみ
庭に植わった松の木に すがりついた衣服

からからり 玄関扉を開ける
帰ってきたのか 出かけたのか
外の畑に 草抜く背中

からからり 机の麦茶が笑う音
かがやく玉を 身につけた
彼らの足元 水たまり

からからり 扇風機が止まる
あなたじゃ この夏の暑さに
勝てることはないだろう

からからり ぬけがらの声

さけた背中と 半透明の体が
夏に残した 土の香り

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

父を目標としたゴルフ

父がやっていたから

ほくも自然と手にしたクラブ

まだ十二歳

握る手は少しぎこちない

半年もたたないけれど

芝生のおいや

青い空に吸い込まれるように飛んでいく白い球に

ほくはすっかり夢中になった

父と並んで立つティーグラウンド

「右を向きすぎるな」

「リズムを大事にしろ」

そんな声が風に混ざって届く

ほくはうなずいて

大人用のおさがりのクラブを振りぬく

重いクラブが体を引っぱる

だけど、当たったときの響きは

胸の奥に　じーんと残る

英数学館中学校一年　山中　呂莞

フェアウェイを歩くときは
ただの運動じゃない

父と同じ歩幅で進むと

なぜか少し背が伸びた気がする

ゴルフ場はどこも違っていて

山の上の涼しい風

海に近い場所のしょっぱい潮の匂い

森の中の鳥の声

その全部が旅の景色みたいで

ラウンドは ちよつとした旅行だ

スコアはまだ九十台

父にはかなわない

でも一打一打に悔しさと嬉しさがあつて

カップにボールが吸い込まれるたび

声をあげて笑ってしまう

負けたくない気持ちと

同じ時間をわかちあえる喜びと

二つの思いが

フェアウェイに影のように並んでいる

いつか父を越える日がくるのだろうか

そのときは

今日より少し広い背中で

父の横に立っていたい

風に流れる雲を見上げながら思う
芝の上を歩く音は軽やかで
この道はまだまだ続いていく

現 代 詩 部 門

広島市長賞

雨模様

県立広島皆実高等学校三年 流出明日嘉

雨が降る

しとしと

バラバラ ザンザン

風が吹く

びいぷう

ビュービュー ザーザー

窓も鳴る

ざしぎし

ガタガタ ゴトゴト

晴耕雨読というけれど うるさくて読書に集中できやしない
頭の痛みもひどくなってきた

そうだ！ こんな時こそ散歩に出かけよう

お気に入りのかっぱに 傘に 長靴

帰ってきた時は ずぶ濡れだろうから

大きなタオルを2枚 玄関に

お風呂のタイマーをセットしよう

体を温めるためのココアも用意して

準備万端 出かけよう

雨が降る

ただ それだけで日常が変わる

ぐると変わる

木の枝が揺れる ざわざわ揺れる 右に左に行ったり来たり

花が項を垂れる いつもは ただ上を向いて太陽を見ているのに
雨水の重さに耐えられず項を垂れる

道には水たまりが出来る

ぽちゃんぽちゃん ぴちゃんぴちゃん

雨が音を立てて 水面に波紋を作る 風ぐ一瞬さえ与えずに

木の下の水たまりは おとなしく木に守られている

私は風いだ水面を 壊す

足を振り下ろす

飛沫が飛び散り 舞う 舞う

私が壊した この世界に変化を起こした

水の這った道を 踏み締めながら 歩く 歩く 歩く

雨の日の散歩は なんて楽しいんだろう

壊れた日常に踊る心 無意識に歌う唇 舞う足

気持ちは バレリーナ

歌手 アイドル 何にだってなれる

傘で閉ざされた私だけの空間で

誰にも邪魔されない私の時間 秘密の時間

雨の世界をたつぷり堪能した後は
温かいお風呂とココアでまったり余韻を楽しもう

外は雨 今も日常を壊し続けている
うるさい音も ひどい頭の痛みも変わらない
でも もう気にならない
だって 私も雨と一緒に
世界をほんの少し破壊したから

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

クラゲ

それは

深く澄んだ水の中

溶け込むように

ただひっそりと

揺れている

掴むことも

掬い上げることもできない

柔らかに冷たい

流れるような体

そのほとんどは水

光を透かすだけの存在

けれど

ほんの5%だけ

水でも光でもない

クラゲだけのものがある

県立広島中学校二年 末広 沙弥

それは

水中を優美に漂うことへの
静かな自負かもしれない

その5%こそが

クラゲを

クラゲたらしめている

広島市教育委員会賞

心の大樹

県立広島皆実高等学校二年 石川直太朗

本がたくさんある場所は

いつもほんの少し木の香りがする

この本棚にある本がどれだけのパルプでできているか知らないけど

本棚を見る時いつも僕には紙でできた大樹が見える

僕は本を手にとる度にその途方もなく大きい大樹の一部を削ぐ

パラパラ パラパラ 音が鳴るたびに

僕の中に小さな小さな木が育っていることに気づく

目の前の大樹は僕の手じゃ到底削り切れないぐらいあつて

しかもぐんぐん ぐんぐん伸びていくのを見ると

僕は嬉しくなる

大樹をよくみると

それは一本の樹などではなく

いろんな木が絡み合っていることに気づく

その一本一本のなんと大きいことか

僕は自分の木を見てその小ささに少し焦る

いっぱいいっぱい紙を与えて

ほんの少しずつ自分なりの形に育ててきた
その木に乗って

まだ見ぬ高みに挑むとき

僕はもつともつと もつともつと嬉しくなる

辺りを見ると周りには

木の育て手たちがたくさんいる

きつと僕たちを遠くから見ると

森のようにみえるんだろう

でもいまその森はどんどん小さくなっている

僕の夢はその森が世界を覆い

誰かが心にある木に気づくこと

その木が栄養を求め 育ち

また新しい森がつくられる

そんな未来を 本をめくるたびに思い描いている

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

せみの命

夏になると

虫の音がうるさくなる

その代表的な虫はせみだ

数十ぴきものせみが鳴くといまいます

朝から夕暮れにまで鳴いてしまうから

自分はいらついちやう

夕暮れになると

せみの声が聞こえなくなる

もうみんな帰ったのかな

自分は夜の静かさで不安になった

寝た翌日も

毎日毎日

鳴いている

そして思う

せみなんて存在しなければいいのに

ある日ひさびさに

外へ出てみた

英数学館中学校一年 孫 福宏

外の道を歩いていると
何びきものせみの亡骸が
落ちていた
それでもまだ
せみは鳴いている
不思議だ
自分の命はみじかいのに
なぜ鳴いてばかりいるの
毎年夏に
せみは鳴きにやってくる
けれど、数ヵ月で
どこかへ行っちゃう
せみがいない春と冬は
外がさみしい
せみがいる夏と秋は
外がさわがしい
それはまるで
人間にたとえれば
昼と夕暮れは元気で
夜や朝は元気がない
というパターンと一緒だ
だから思った

せみはただ鳴いているだけではなく
みんなの気持ちを悲しく気まずい
空気をおくらないように
さわがしくしていたことを
夏休みだからこそ
みんなでもりあがつて楽しもうということ

現 代 詩 部 門

笑顔の魔法

県立広島皆実高等学校二年 坂本 あゆ

僕たちは大学二年になった
一年の時と比べ 課題の量は突然 倍以上になり
睡眠時間はどんどん削られていく
だから毎日 僕を含めみんなが
疲れきっているのは当たり前のことだと思う

だけど 隣の席に座る彼女は
僕たちなんかより 相当しんどい状況だ
なぜなら とんでもない量の課題に加え
彼女は重い病を抱えている
近々入院することが決まったらしい

明るく振る舞っているけれど いつも顔色は良くなって…
きつと入院しなければならなくなったことが
相当 心の負担になっているんだと想像している

君はよく僕にこう言う

「ねえ！笑顔になれる魔法をかけて！」

本当に魔法をかけてほしいのではなく

ただ みんなのように元気で 一日中 学校にいたい
未来への希望を持ちたいという想いの比喩なのだと思う

でも 僕は素直なキャラじゃない

「うーん どうしたらいいんだろうね」

「僕には何のとりえもないからね」

君をからかいながら のらりくらりと僕は答えをはぐらかす

君も本気で言っているわけじゃないんだろう

僕が答えなくても真剣に追求して来ないから

僕は「君の願いなんかたいしたことじゃない」

と思っている

そんな風に見せている

でも本当は：

「君に魔法をかけてあげたい」と

真剣に願っているんだ

君にはずっと笑顔でいてほしいから

やりたいことが何だつてできるようになってほしいから

僕は「君のための魔法使い」になりたい

だから 見つからないようにこっそり

君にかける最高の魔法を準備してる

白衣をまとい 僕は日々学び続けているよ

まだまだ完成には時間がかかりそうだけど

君のために編み出そうとしているいくつもの

僕の魔法

いつか君にかけることができる日まで

どうか生きることをあきらめないでいてほしい

現 代 詩 部 門

旅

春のキャベツを取り出すと
小さな虫がいた
シャキシャキ美味しい
お布団で
のんびり旅を
していたのかも

いただきます
美味しく育ったミニトマト
切っていいねいに種を
取り出して
きれいに洗って種にして
植えたら命がつながった
美味しく育った野菜
立派でつやつやカラフルで
料理をして食べると

廿日市市立七尾中学校一年 井上 亜子

たちまち笑顔で幸せに
命の旅はつながっていく

セミのゆめ

たいへん たいへん たいへんだあ

うーんと うーんと てをのぼし
なんども なんども てをのぼし
がっこうの さくらの きのセミを
なんども とうとう したんだよ

なんども なんども にげられて
なんども おしっこ かけられた

おしっこ かけられすぎるとね
セミのまほうに かかるんだ

つぎのひのあさ おきたらね
ほくのからだは へんしんだ
セミのからだに へんしんだ
あした セミに なるのかな

海田町立海田小学校一年 石原 亮平

ゆめ
のな
かで

みた
んだ
よ

ギリギリス

ぼくの家にはギリギリスがいる
名前はギリス

ギリスはみどり色の体
ギリスはギリリギリリとなく
ギリスはやさいを食べる
ギリスは元気にジャンプする

ギリス、もうすこしいっしょにいようね

海田町立海田小学校二年 ほりあきと

現 代 詩 部 門

お兄ちゃん

海田町立海田小学校四年 北島 彩羽

おーい お兄ちゃん

って叫んでも お兄ちゃんのいない部屋

お兄ちゃんに会えなくなつて一週間

病院でお腹空いてないかな？

会いたいな

最初はお兄ちゃんがいないくて

おかし半分こにしなくていいから

うれしいって思った

お兄ちゃん 元気？

私のこと忘れてない？

足痛いのなおった？

全然返事のないお兄ちゃん

会いたいよ

さみしいよ

早く帰ってきてよ

今度はたっぷりおかしあげるから

お兄ちゃんの部屋で

毎日寝るとね

お兄ちゃんのおいがするよ

一般の部

入賞

広島県知事賞

父と

福山市 高垣 亜矢

病院に行く父を車に乗せる
こぶしを握った手を膝に置いて
前を向いたまま動かない
写真屋のお客さんみたい
はい締めますよ
パチン

父が乗るカブのうしろにまたがり
書道教室や写生大会に出かけた
ん、とあごをあげると
父の手が白いヘルメットをパチンと締める

カブを手放した日から

父は死の影に怯えだした

覚えてる？

父はわたしの誕生日を言った
病院へ行く日を何度も聞いた

けっこうな年齢になった娘に

「五十か、まあよかろう」と首を振った

振り落とした夢があつたことを

初めて聞いた

写生大会で描いた車の窓に

父とわたしを小さく入れた

迎えに来た父には見せなかった

そよぐシャツとたばこの匂い

横に走る二人の影を見ていた

広島県議会議長賞

命をつなぐ米

呉市 溝口 京子

米にまつわるニュースが
日々波のように打ち寄せてくる
「備蓄米、五キロ三千円」
数字が独り歩きする

胸が騒ぐ
子供時代の物語が私を呼ぶ

白く光る一粒一粒に命を見た
洗う時、一粒も流してはいけない
食べ残すとお茶碗から火が出て
二度と食べられなくなる

我が家の小さな田は宝物
父は牛とともに、土の匂いと声を聴く
母は粃を撒き、命を育てる
私の指先が、油紙を敷く作業を手伝う

命が顔を出すと、カエルの合唱が響く
オタマジャクシが水面に光り囁きあう
家族は腰をかがめて、綱の印に
明日の命をつなぐ

稲穂が実ると、鎌の音
汗と泥と、稲の重さが肩に響く
背中の痛みは、明日の命をつなぐ

あれから六十数年
田は広大になった
温室で苗は育つ
機械が明日の命をつなぐ

それでも、畔の草は、人の手で刈る
もう大豆は植えない

焼けた肌と汗が、黙々と今日も草を刈る
胸のどこかが熱くなる

風に揺れる稲穂が謳う

科学の力と農業者の知恵を生かせと
若い手に誇りをとす知恵を出せと

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

ゲンへの手紙

広島市 大澤 優子

どこかで出会ったあの裸足の少年は
いつも怒りを露^{あらわ}にしていた

（ヒロシマのことは知ってるけど知らない
ヒロシマのことは知らないけれど知ってる）

あなたは受難に遭^あいましたね

私はアメリカくんだりにまで出向いて

あなたのことをお話したのです

そこで何かを手に入れた気になっていましたが
スーツケースを開けたら

出てきたのは美しく輝く千羽鶴の束だけで

あなたからの手紙は

どこかで失くしてしまったようです

あの日あなたから託された宿題

あの残酷な爆弾が二度と使われないために
どうしたら良いか

私のノートは空白のまま時が経ち
とうとう八十年めの日を迎えてしまいました

漫画家となったあなたの眼の中の
強い光は今も忘れることができません

そうそう

それでも小さなコミュニティーセンターの
片隅には地元のアメリカ人の誰かが
用意してくれた私の資料のコピーの束が
置かれていました
アルファベットの文字の中に
あなたの顔が埋もれていたのです

その顔は笑っていたのに
それを読んだアメリカ人たちは
なぜか沈痛な表情を浮かべていました
あなたは今や

何十ヶ国語も話せるようになって
世界中を飛び回っているのですね

あなたの強さも勇気も持ち併わせてはいませんが

「まだまだ言い足りていないのだから」

一度だけインタビューした

あの漫画家の先生の言葉が

いつまでも胸に突き刺さって疼くのです

つたない言葉でしか綴れませんが

いつかまた

この手紙の続きを書きたいと思います

そのときは少しは良いことを

ご報告できればいいのですが。

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

骨

広島市 箭田 儀一

掘り起こされた土地に
白く、ひび割れた骨が埋もれている
雨が降るたびにその表面は
滑らかに湿り、
風が吹けば
細かく碎ける

この骨たちは語らない、
戦火の中で散り散りに消えていった
命の記憶も、
傷つけられた地面も、
すべてが無音であつた
ただ、あらゆるものを静かに残している
赤い空が燃えた時、
あらゆる生命が数えきれないほどの瞬間に
同時に消えた

だが、この白い骨のひとつひとつには
まだ、
死ぬことを決めた者たちの意志が
刻まれている

どんな兵士も、
どんな命も、
もはや戦争の記憶の中で
肉体を捨てた
ただ、
骨だけが、
時の隅で微動する

土の下で眠りながら、
その骨はまだ夢を見ている
破れた旗がなびく、
どこかで煙が立ち上がる
戦場の記憶が風とともに流れ
骨の中に、
そのすべてがまた戻る

銃声のない日々に

こうして、
静かに膝をついて
骨を拾い集める
だがその手は震えない
もう、
痛みを知ることはないのだから

無数の足音の中で
踏みしめられた場所に
ただひとつだけ
本当に残ったものがある
骨たちはただ
震えることなく、
ひっそりと、
時を待っている

広島市長賞

名月

西の空に
抱かれるように
歩いていた

透き通った色の
夕焼けは
想いを寄せる私に
別れを告げ
おだやかに沈んでいく
海の中へと

私はひとり
この海辺の街の
孤独の中に
残された

涼やかな風吹く

安芸郡海田町
竹野内康子

名月の晩

遠く離れた山間の

緑輝くふるさとに

黄金の稲穂は波打ち

彼岸花の群れは

畦道に揺れ

父はひとり静かに

病室に眠る

閉じた瞼に

月光は届いたのだろうか

微かな呼吸の中で

百回目の

この世の秋を

記憶したのだろうか

天に召される

最後の夜

神々しく

孤高を保つ

天空の球形

私はこの街の橋の上で
ひとり、その月を見ていたの、
お父ちゃん

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

闇屋の源さん

庄原市 奥井 久子

米不足 備蓄米 古米

ふつと蘇る遠い日 闇米 闇屋

色黒でやせた体に大きなリュック

キラッと光る澄んだ瞳

終戦まもないわたしが小学四年生の頃

蟬の声と共にやってきた闇屋の源さん

リュックから手品みたいに出てくる品物

白い運動靴 白いゴムボール

海の魚の干物 いりこ 海苔……

お茶とたくあんを出す祖母

きまって二人の話が始まる

原爆で家族三人も失った源さん

ゆっくりと とつとつと

土間の上の煤けた黒い梁^{はり}を見上げて

話しだす源さん

正義の戦争だ 国に命を奉げよと
終戦 正義はひっくりかえった
ごまかしの正義で息子も母も死んだ
正しい戦争なんかない
死んでいい命なんてひとつもない

源さんの握りこぶしが震えていた
原爆で子どもを失った祖母
二人の目にキラリと光るものがあつた

急に話を変える源さん
「命はここ 大切にね。」
左胸を右手でポンとたたく
わたしも いつものようにまねして
「命はここ 大切にね。」
と源さんと笑い合う

米の売買は当時禁止
源さんは闇屋 警察に追われる人
でも源さんは言う
人間は柔^{やわ}じゃない 生きる術^{すべ}を探す
都会の人は米がない 田舎の人は物が

お金のかわりに米をもらう
その日わたしは ゴム草履を卒業
まっ白い運動靴を米で買ってもらった
その夜 うれしくて靴を抱いて寝た
少し干し魚のおいがした

彼岸花が畝道を赤く染める頃
急に姿を見せなくなった源さん

風のうわさ

矢野駅で警察の手入れ
闇米を線路に投げて飛び降りて大怪我

でも源さんは きつと元気になって
しっかりと残された家族を守っていると

原爆投下から八十年

蝉の声にまじって

「命はここ 大切にね。」

源さんの声が聞こえたような気がした

現 代 詩 部 門

広島市教育委員会賞

駅

広島市 正本 忠臣

頼まれて 2 番線ホームから電車に乗った
大きな駅で下りて

乗り換えるホームを探したけれど
どこにあるのか分からなかった

土産物売り場の若い女の人が

駅の隅まで連れて行ってくれた

柱の陰にあった長い階段を下りて行くと

電車が止まっていた

空^すいていて窓側に座れた

視界は白い壁で遮られていた

高いビルの間を走り抜けると 人家が続き

黄色や青や灰色の小さな屋根は

様々な方向を向いていた

踏切では遮断機が下りて警報機が鳴っていた

小高い丘が見えた 横に長い塀があつて

塀の上には長い屋根が架けられていた
畑が広がった 何かが植えられていた
時折川があつて
その度にそこで畑はいったん終わつていた

駅に着いた 屋根のある階段を上った
裏側の改札口の箱に切符を入れて外に出た
直ぐ道で 道の向こう側は

金網のフェンスで畑と仕切られていた
フェンスの下を茶色の猫が歩いていて

街まで歩いて行つた 家並の中を歩いた
お寺を過ぎた所は空地になつていて

その先に二階建てのアパートがあつた
通路を挟んで両側に部屋が並んでいた
3号室の隣は5号室で

板張りの戸をノックしてみた
返事はなかった

しばらく待つてみたけれど 会えなかった
アパートを出て お寺の境内に入つて
鐘撞き堂の石の縁に座つて休んだ
向こう側の縁を灰色の猫が歩いていて

アパートに戻ってみたけれど

人は帰っていなかった

街で食堂を探した

お金はテーブルの上に置いて出た

アパートの部屋に人のいる様子はなかった
待ったけれど 帰って来る人はいなかった

駅はもう薄暗くなっていた

階段を上り下って 電車に乗った

もう小高い丘の風景は見えなかった

大きな駅で13番ホームに上がった

電車が来たけれど でも乗らなかった

戻って 柱の陰にあった長い階段を下りた

電車は夜のビルの間を走り抜け

人家の上を通り過ぎた

外は暗くて もう何も見えなかった

所々 通り過ぎる白い電灯が眩しかった

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

こーちゃんとよーじ

広島市
清見久美子

玉つき屋の夫婦は忙しい
親戚の家に二人の息子を預けて仕事する
ある日おばあさんが二人の孫を連れに来て
久しぶりに家に戻った
八月五日だった

二人の息子は死んだ
玉つき屋の夫婦も死んだ
おばあさんは生き残り
おじいさんはおばあさんを責めた
どうして連れて帰ったかと
ずっとずっと責め続けた

おばあさんは二つの人形を並べて
拝んだ
その人形は男の子だった
焼き物で膝を立てて座っていた

かわいい顔をしていた
布で作ったちゃんこを着ていた
おばあさんはその人形の前に座り続けた
こーちゃん
よーじ
おばあさんは呼び続けた

桃

ほくは果樹園の暗い小屋に座し

野良着をはだけ

扉を少し開けて

桃がかすかに匂ってくる錯覚にとらわれている

どこか遠くから――

ほくは驟雨が過ぎるのを待っているのである

一夏の終わり――

樹間に造船所のクレーンがかすんで見える

離れ棲む系累を追うことを徒勞と決め

少しづつ罪に慣れていく日々

冬の陽だまりのような記憶のなかで

ほくはいくたび帰郷を試みたことか

比国から

海を歩いて帰ると便りをくれた父のように――

尾道市 仲尾 修

やがて暗くなる記憶の淵に
ぼくよりもはるかに若い
軍服の父が立つとき
ぼくの記憶はそこから茫漠となっていくのである
いつも――

あの日

冬の戸を閉めながら

弟は

「生きゆくはつねにさびし」と言ったのである

その後 ぼくは

弟のアドレスを知らない

楽しさ運ぶ鈍行列車

三次市 立田 幸子

眩しい朝日の抱擁の中
元気に目覚めた 今日へ
銀の鈴の音^なひびかせて
感謝の祈りを

好きな事だけ
好きな物だけ

それが許される今

八十路越えて
鈍行列車は動く
乗車して知る 喜びの数々
年と共に
広くなった 心の部屋には
宝物の健康が
楽しさ求めての 旅へと動き出す

車窓に広がる 見慣れぬ景色を
色褪せて行く思い出あとに

未知の世界へと

いざなうスマホ手に

楽しさ運ぶ鈍行列車は

今日も

広野を走る

夜の訪問者

東広島市 高橋 克知

その夜 ベランダに
サン・テグジュペリが
ひっそり降りていた

鈴の音の転がる空の
月灯りに照らされて
砂漠は 湖のように白かった

緑の服を着て
彼のとなりに座る
マツチを擦って
暖をとる

夢のなかにも 風が吹く
乾いた砂がこぼれ
地平線をながれていく
リンドバードも カンパネラも

今日は 深く 眠っている

彼がノートをひらいた
星座のスケッチ 羊の絵
そのかたわらに
薔薇や キツネたちの言葉が
ならんでいた

聞きたいことは
たくさんあった

それなのに 砂は もう
指から すりぬけていて

マッチを もういちど 擦った
頬の輪郭が 灯りのむこうに
ほやっと 浮かんでいた
目がさめるまで 彼を
よく 見ておきたい

パノマトペ

廿日市市
野田友里恵

桜が舞い踊る日
川に落ちた花を眺めるのは好きだ
水の透明と光に当たって反射する白が
何度もピンクをまじえて通り過ぎていく
どこからきたのか
赤や黄色も少し紛れて水と踊る
はらり、ぴとん。さらさら、ぴちゅん
また一枚、水と出会う音
美しい景色をつくる音

五月雨が鳴く日
雨音を聞きながら眠るまでの時間は好きだ
暗い部屋の中
布団と薄いブランケットに挟まれ閉ざれ
小さな世界で一人きりになったよう
そんな感覚の中、私に興味なさげな態度で
静かに寄り添うような音

さらさら、ぱたっ、ぽつり、ぴちゃん
今日の私を眠りに包んで過去へ送る音

木の葉が自由を知る日

落ち葉が土と暮らす道は好きだ

茶に染まった葉が地面と転がり遊びこける

少しの黄色や赤も混ざり

ただの土道ではないことを主張する

さく、ぱきん、かさかさ、くしゃり

子どもも大人もやっぱり好きで

少しうずうずしてしまふ音

木々が作り出すおもちゃの音

白い息が空に溶ける日

雪が傘にあたる音は好きだ

雨粒では出せない違う音

氷に水が混じりそうな、その両方の音

カサッ、パサッ、トン……………

タ、タ、タタ……タッ

静かに、でも悲しくないように

ほんの少しだけあたたかな音

家の中には得られない

雪と共に過ごした証明の音

ふと気が向いた日

ものを書く私が好きだ

自分の感性と、感情と

目の前の言葉と話し合うように

次の言葉を紡いでいく

ひとつの文字、単語、文章に向き合って

音を奏でるように、編み物を編むように

トン、さらさら、さり、さり、しゅっ

紙に文字がえがかれていく

一歩一歩を私のこの手で

歩くように、泳ぐように

掘るように、掬うように

飛ぶように、踊るように

言葉を繋いでいく音

私の世界が

またひとつ出来上がった

現 代 詩 部 門

川 柳

選
者

(小・中学生の部)

鴨 田 昭 紀

(高校生・一般の部)

田 辺 与 志 魚
小 島 蘭 幸

小・中学生の部

入賞

広島県知事賞

くじけても風がせなかをおしてくる

大竹市立小方小学校五年 村岡 馳太

広島県議会議長賞

春の風みんなの心ぽつかぽか

廿日市市立佐方小学校三年 伊藤 杏

広島県教育委員会賞

勉強で頭の中が暴風雨

廿日市市立佐方小学校六年 石丸 龍汰

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

おにごっこ風をおいこしタッチする

廿日市市立地御前小学校三年 高見 駈

広島市長賞

大逆転風向き変わる好プレー

廿日市市立佐方小学校六年 藤滝 龍馬

広島市議会議長賞

風にのせ平和の手紙とどけたい

廿日市市立地御前小学校四年 牧野 大輝

広島市教育委員会賞

そよ風に思いをのせてとどけます

廿日市市立佐方小学校六年 小倉 慧夢

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

やって来てまた去って行く風の歌

廿日市市立地御前小学校六年 向井 優月

題「風」

鴨田 昭紀 選

特
選

くじけても風がせなかをおしてくる

大竹市立小方小学校五年 村岡 馳太

【評】 人生は七転び八起き。努力をすれば必ず結果がついてくるものと信じて、決して諦めず何度も起き上がることです。

春の風みんなの心ぼつかばか

廿日市市立佐方小学校三年 伊藤 杏

【評】 如何にも春を待ち望んでいた気持ちがひしひしと伝わってくる。特に下5のぼつかばかの言い回しが面白い。

勉強で頭の中が暴風雨

廿日市市立佐方小学校六年 石丸 龍汰

【評】 学校の宿題や塾通いで忙しい毎日が目に浮かぶ見付けが面白い句。今は大変だと思うが、将来のためにも頑張ろう。

おにごっこ風をおいこしタッチする

廿日市市立地御前小学校三年 高見 駈

【評】おにごっこやかくれんぼする光景も今ではあまり見なくなつた。風を追いつくくらい外で走り回って欲しいが・・・。

大逆転風向き変わる好プレー

廿日市市立佐方小学校六年 藤滝 龍馬

【評】紆余曲折の人生に通じるものがある。カープやサンフレッツチエも是非こうあって欲しいものだ。

風にのせ平和の手紙とどけたい

廿日市市立地御前小学校四年 牧野 大輝

そよ風に思いをのせてとどけます

廿日市市立佐方小学校六年 小倉 慧夢

やって来てまた去って行く風の歌

廿日市市立地御前小学校六年 向井 優月

夏色にそまった風がほほなでる

庄原市立比和中学校一年 光元 杏香里

争いが終わったあとは重い風

大竹市立小方小学校五年 國武 知矢

うれしいと幸せの風吹いてくる

大竹市立大竹小学校五年 村上 結香

強風があせる私を責めている

大竹市立小方小学校六年 海井 明香里

冬の夜家に入れてとねだる風

広島市立中山小学校四年 古谷 柊依

ここちよいエアコンつけて本を読む

廿日市市立地御前小学校三年 原本 みのり

あのころの時の流れは風のように

大竹市立小方小学校六年 柴原 桜介

車窓開け耳で奏でる風の音

大竹市立小方小学校六年 谷 颯太

うわさはね風にのってねやってくる

大竹市立大竹小学校五年 立川 実希

天にいる母さんの声風とくる

大竹市立小方小学校六年 藤本 庸介

せんたく物風にたのしくおどってる

広島市立千田小学校四年 山田 歩夢

風がふく北風こぞうきたのかな

廿日市市立佐方小学校四年 沖 政宗

この葉まうどこかさみしい秋の風

廿日市市立地御前小学校四年 小山尚之助

風にのるぼくの気もちがまい上がる

廿日市市立地御前小学校四年 徳永 湊

そよ風も君の気持ちもさわやかだ

廿日市市立地御前小学校五年 堤 湊亮

すすきゆれ月を見ながらだんご食う

廿日市市立地御前小学校六年 南原 稜

そよ風がきみの心をおどらせる

廿日市市立地御前小学校六年 掛本 結日

春風がわくわくさせる新学期

大竹市立小方小学校六年 車屋 実咲

いじわるなかなぜにあまがさうらがえる

広島市立大町小学校一年 筒井 水宙

気持ちよいクーラーの前一人じめ
 とりたちは平和な風を知っている
 風と風どちらが先にとばせるか
 声えんが追い風になりホームラン
 春風にあたるとみんな笑顔だよ
 風がふく未来へ続く広い空
 風にのりあの子に気持ちとどくかな
 北風をまとい登校冬の朝

大竹市立大竹小学校四年	岩岡 良
廿日市市立佐方小学校二年	西本 明叶
廿日市市立佐方小学校五年	石田 理菜
廿日市市立佐方小学校五年	田村 直輝
廿日市市立佐方小学校五年	隅 柊二郎
廿日市市立佐方小学校五年	新田 航己
廿日市市立佐方小学校六年	中原 悠月
廿日市市立佐方小学校六年	堤 清葉

川 柳 部 門

高校生・一般の部

入賞

広島県知事賞

コスモスの波を泳いで行く帽子

庄原市 新宅 涼枝

広島県議会議長賞

積み上げた八十年にある矜恃

福山市 村田 幸夫

広島県教育委員会賞

八月の予定は平和へのロード

広島市 羽城 裕子

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

いろいろな波と遊んだ丸い石

東広島市 渡辺 典子

広島市長賞

おはようの笑顔はいつも洗い立て

三原市 笹重 耕三

広島市議会議長賞

望郷の耳朵に棲んでる波の音

尾道市 前中 吾一

広島市教育委員会賞

これからも戦後百年二百年

広島市 福田 淳子

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

さざ波が岩をも砕く平和賞

庄原市 石田 素風

題「波」

田辺与志魚 選

特
選

コスモスの波を泳いで行く帽子

庄原市 新宅 涼枝

【評】簡素な表現ながらもつきりと情景をとらえたのがすごい。帽子の主は恋人であろうかそれともお子さんだろうか。

いろいろな波と遊んだ丸い石

東広島市 渡辺 典子

【評】おそらくは波乱の人生であろうがここではそれを遊んだ、と書いた。まさに丸い人格がそこにある。

望郷の耳朶に棲んでる波の音

尾道市 前中 吾一

【評】たしかなことばの選択と順序の構成が完璧。ふるさとの波音は作者の中にはつきりと残り決して消えることはない。

さざ波が岩をも砕く平和賞

庄原市 石田 素風

【評】 平和賞にたどりつくまでのあくなき活動をさざ波としたことでこの句が大きくなった。読者の感動をよび起こす。

波の打つ太鼓は生きる音となる

呉市 荒新 悠子

【評】 潮の打ち寄せる音のように力強く生きることが人間の理想であろう。そこにゆるぎない応援歌を聞いた。

何もかも奪った波が風いでいる

五体にも喜怒哀樂の波が住む

老いの道まだ押し寄せてくる波紋

我が想い行き着く先を波に問う

正直に鏡が告げる老の波

恋一つ波に隠れた物語

買い物の手をまよわせる税の波

荒波をくぐった指の太い節

瀬戸の波静か浄土の声を聞く

潮騒が心の澱^{おり}を流し去る

広島市 周藤 悠奈

広島市 河浦 邦子

福山市 宝諸 京子

広島市 中森 明子

三次市 林 勝子

尾道市 砂田 千春

広島市 田辺美和子

広島市 日下 洋子

広島市 高橋 孝造

福山市 貝原 辰二

関税の波が七つの海に立つ

いつの日も消波ブロックだった母

残り火を静かに瀬戸の波まかせ

大波小波もまれどこでも生きられる

思案している間に波が消えている

さざ波を軽く見ていた高い付け

浮き浮きの波状攻撃孫が来る

バツイチがどしたん波が荒れただけ

ライバルが一行で行く波がしら

球場に大波小波うねる波

広島市 吉村 充

福山市 村田 幸夫

竹原市 室 晃二

広島市 福田 淳子

広島市 有田 澄子

広島市 大杉 綾子

東広島市 寺内由美子

三原市 部 帆子

広島市 大杉 卓雄

府中市 田辺 羽子

題「自由吟」

小島 蘭幸 選

特 選

積み上げた八十年にある矜恃

福山市 村田 幸夫

【評】被爆八十年、戦後八十年、積み上げた平和は私たち日本人の誇りです。

八月の予定は平和へのロード

広島市 羽城 裕子

【評】八月六日、九日、十五日、平和への道はどこまでも続いてゆくのです。

おはようの笑顔はいつも洗い立て

三原市 笹重 耕三

【評】幸せな家族の朝の情景が見えるようです。「おはよう」「笑顔」が爽やかです。そして下五の「洗い立て」が良い。

これから戦後百年二百年

広島市 福田 淳子

【評】この平和がずっと続いて欲しいという熱い思いがひしひしと伝わってきます。「百年二百年」のリフレイン最高です。

温暖化もしかして核より怖い

呉市 熊川 勝彦

【評】猛暑、大雨、竜巻き……。この句は、温暖化を最初に持つて来たことで、温暖化の怖さがより強く伝わってきます。

入 選

空想で君の名字になってみた

玉手箱抱いた私が立っている

ダイエット阻む夫の半分こ

卵焼夫の味が好きでした

ウガイしてマスクを掛けて初曾孫

老いる身のころはせめて美しく

平凡がいい人生の着地点

セブ島でパラセーリング青春だ

ハードルが一年おきにある卒寿

帳尻を合わせて旅に出るつもり

福山市 栗原 裕子

福山市 田辺 豊子

広島市 近末 夕子

三原市 薮 帆子

竹原市 室 晃二

尾道市 村上 和子

広島市 河浦 邦子

県立福山誠之館高等学校一年 新田 暁

広島市 大林 載孝

福山市 早川 迷子

パリコレのドレス着こなすウインドー

尾道市 岡田 容子

夢ばかり見ていた頃の作業帽

東広島市 大木 雅彦

ばあちゃんと抱きついてきた子は二十才

広島市 岡田 郁枝

Vサイン百まで生きた顔がよい

広島市 岡崎 立子

風穴を開けた女の初一念

広島市 吉村 充

ひと言が明日の扉を開けました

広島市 中野 妙子

柳誌来るもう載らぬ名をまだ探す

福山市 門田ひとみ

大病は心を洗い無にさせる

広島市 持永 光子

シェーカーを振るマスターに一目惚れ

三原市 吉永 団風

皆人の流す灯籠平和祈ぐ

広島市 村上 中

作品募集要項

■趣旨

文芸に親しむ人々から広く作品を募集し、発表、交流の機会を設けることで、文芸への理解を深め、広島県の文化を高める祭典とします。また、表彰式・分野会を行います。

■主催 けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団

■事業内容

応募のあった作品について審査を行い、入賞作品等を決定し、表彰します。
※入賞・入選された方には、大会1か月前頃に通知します。

■応募締切 令和7(2025)年9月5日(金)必着

■応募資格 広島県内に在住している人、通勤、通学している人及び広島県出身者

■応募先

【郵送】 〒730-0051 広島市中区大手町一丁目5-3 広島県民文化センター内
公益財団法人ひろしま文化振興財団

■賞

短歌、俳句、現代詩、川柳の分野ごとに広島県知事賞・広島県議会議長賞・
広島県教育委員会賞・けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞等を授与します。

■表彰式・分野会

日時：令和7(2025)年12月14日(日)午後1時～
場所：広島県民文化センター（広島市中区大手町一丁目5-3）

■作品集

短歌、俳句、現代詩、川柳の入賞作品等を掲載した作品集を刊行し、表彰式会場にて無料配布しますが、郵送を希望される場合は、郵便番号・住所・氏名を明記し、230円切手を貼付した角5（横19 $\frac{1}{2}$ ×縦24 $\frac{1}{2}$ ）以上の返信用封筒を応募先に郵送してください。（作品集の発送は、表彰式終了後、順次行います。）※令和7(2025)年11月1日郵便料金改定

なお、応募された作品の著作権は、けんみん文化祭ひろしま実行委員会に帰属します。
※全応募作品を掲載した作品集は作成しません。

■個人情報の取扱い

「文芸祭応募用紙」に記載されている個人情報は、「個人情報の保護に関する法律」に基づき厳正に管理し、文芸祭の実施とそれに付随した入選者等の発表・作品集作成のために使用します。入賞者については、名前・住所（市区町名まで）を報道機関に提供し、名前・住所（市町名まで）・作品を（公財）ひろしま文化振興財団ホームページ等に掲載します。

なお、小・中・高校生の部については、「文芸祭応募用紙」に記載されている個人情報は、「個人情報の保護に関する法律」に基づき厳正に管理し、文芸祭の実施とそれに付随した入選者等の発表・作品集作成のために使用します。入賞者については、名前・学校名・学年を報道機関に提供し、名前・学校名・学年・作品を（公財）ひろしま文化振興財団ホームページ等に掲載します。

■問い合わせ先

公益財団法人 ひろしま文化振興財団
〒730-0051 広島市中区大手町一丁目5-3 広島県民文化センター内
TEL 082-249-8385 FAX 082-249-7531

短 歌 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作 品

未発表作品とし、一人一首とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類似作品と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県歌人協会

俳 句 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作 品

未発表作品とし、一人一句とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・類句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： (公社)日本伝統俳句協会 (公社)俳人協会広島県支部 広島県現代俳句協会

現代詩 応募規定

●募集区分

一般の部 小・中・高校生の部

●作 品

未発表作品とし、一人一編とします。（応募作品はお返ししません。）

●応募方法

所定の応募用紙、または原稿用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。本文は、原稿用紙3枚以内とします。

●その他

同一作品及び類似作品による他の文芸事業への重複応募はお断りします。応募規定に違反する場合は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県詩人協会

川 柳 応募規定

●募集区分

高校生・一般の部 小・中学生の部

●作 品

未発表作品とし、一人各題二句詠とします。（応募作品はお返ししません）

●応募方法

所定の応募用紙に黒のペンかボールペンで、**楷書**で必要事項を記入のうえ、応募してください。

●その他

応募規定に違反する場合及び盗用・暗号句と認められた作品は、入賞等を取り消します。

共 催： 広島県川柳協会

けんみん文化祭ひろしま'25 文芸祭 応募状況

地 区	市 町	短 歌		俳 句		現代詩		川 柳	
		一般	小・中・高	一般	小・中・高	一般	小・中・高	高校・一般	小・中
広 島	広 島 市	71	278	127	551	16	6	99	42
西 部	大 竹 市	1	0	3	194	0	12	4	489
	廿 日 市 市	4	300	9	851	3	214	6	837
呉 ・ 安 芸	呉 市	15	246	17	389	1	0	24	0
	江 田 島 市	3	6	2	5	1	0	5	0
	府 中 町	4	0	18	157	2	0	5	1
	海 田 町	0	0	2	376	1	3	0	0
	熊 野 町	0	0	0	0	0	56	1	0
	坂 町	0	0	0	270	0	0	0	0
東 広 島	東 広 島 市	5	7	12	323	3	3	16	1
芸 北	安芸高田市	3	62	2	211	0	0	0	0
	安芸太田町	1	0	8	0	0	0	0	0
	北 広 島 町	0	0	0	92	1	0	2	0
尾 三	竹 原 市	2	0	6	0	0	0	4	0
	三 原 市	8	21	1	22	3	0	5	0
	尾 道 市	9	133	15	201	3	0	13	0
	大崎上島町	1	0	3	0	0	0	1	0
	世 羅 町	3	0	0	0	2	0	3	0
福 山	福 山 市	20	366	60	601	3	195	33	2
	府 中 市	1	12	4	0	0	0	5	0
	神石高原町	0	69	0	7	0	0	0	0
備 北	三 次 市	12	20	10	2	2	6	5	0
	庄 原 市	12	59	8	82	2	10	11	42
県内小計		175	1,579	307	4,334	43	505	242	1,414
県 外		0	0	2	0	0	0	1	0
合 計		175	1,579	309	4,334	43	505	243	1,414

けんみん文化祭ひろしま'25 文芸祭 大会記録

- 【開催日】 令和7年12月14日（日）
- 【場所】 広島県民文化センター
- 【主催】 けんみん文化祭ひろしま実行委員会、公益財団法人ひろしま文化振興財団
- 【共催】 広島県歌人協会、(公社)日本伝統俳句協会、(公社)俳人協会広島県支部、広島県現代俳句協会、広島県詩人協会、広島県川柳協会

【プログラム】（予定）

- ・表彰式（13：00～13：30）

入賞作品の発表・表彰式 等

- ・分野会（13：45～15：00）

短歌

各選者による講評 等

俳句

各選者による講評 等

現代詩

入選者の表彰、各選者による講評、入賞・入選者による作品の朗読 等

川柳

各選者による講評 等

けんみん文化祭ひろしま'25 文芸祭 合同作品集

編集・発行 令和7年12月

けんみん文化祭ひろしま実行委員会
〒730-8511 広島市中区基町10-52
広島県環境県民局文化芸術課内
TEL(082)513-2722

公益財団法人ひろしま文化振興財団
〒730-0051 広島市中区大手町1-5-3
広島県民文化センター内
TEL(082)249-8385

印刷 株式会社中本本店